Neo Genesis 52
インタビュー：Hiroko Yamamoto

ALICE NINE

SHOU SAGA

ライヴの興奮が冷めやらないうちに将と沙我にあの日の感想と、完成したニューアルバム『GEMINI』について、じっくりインタビュー。二面性をテーマにしたアルバムということもあり、２号連続で対極のスペシャルフォトセッションを敢行。先月号の“陰”に対して、今月のテーマは“陽”。ギラギラのグラムロック・テイストに挑戦！

初の武道館ワンマンが終わったまだ間もないけど（取材時）今の心境を教えてください。

沙我：意外とサラッと終わったというか、いろんな人に“すごくよかった”とか“感動した”って言ってもらえて自分的にもすごく楽しめたんだけど、ステージに立ってる最中に、“もっと、こうしてやろう、ああしてやろう”ってイメージが湧いてきて、ワクワクしましたね。当然、それまでに練習してきたことを100%やりきったんですけど、やってみてさらに自分の中で可能性が広がっていったので、そういう意味で“もう終わりか”って思って……

もっと、こうしたいっていうのはパフォーマンス？プレイ？

沙我：ライヴの見せ方すべてですね。ベースの立ち位置って3人の背中を見てるじゃないですか？そのせいか妙に落ち着くというか、客観視できる不思議なポジションなんですよ。いろいろとアイデアが思い浮かんじゃって。

将：俺は前半でヒロトが近くに来て、“気持ちいい～っ！”って叫んでたのが印象深い（笑）

（笑）ヒロトくんらしい。

将：でも、思ってた以上にやりやすかったし、自分の中でしっくりきたステージだったので、ライヴの最中にここにもう1回立ちたいって考えてしまうぐらい楽しかったですね。国際フォーラムのときみたいに、いっぱいいっぱい感もなかったですし。

MCで、ここから見える景色をみんなにも見せたいって言ってたけど、どんなふうに見えた？

将：想像して以上に“TOKYO GALAXY”でした。武道館がゴールだなんて思ってなかったけど、実際に立ってみると胸にくるものがありましたね。もちろん、ここで、満足しちゃダメだっていうのもあるけど、そんなことは置いといてホントに楽しかった。

客席の空気もすごくあったかいなって思ったんですよね。

将：収穫だったのが、メンバーと同等かもしくはそれ以上の思い入れを持ってお客さんが武道館に臨んでくれてるなって。そういう空気は始まったときから感じてましたね。スタッフさんも含めいろんな人が高いモチベーションで、あの日に向き合ってくれてるのが肌でわかって、ホントに嬉しかった。

沙我：俺は2階席の後ろの人はどんな感じなのかなって、すごく気になってまし

たね。意識をちゃんとそこまで届けるような気持ちで演奏してました。

オープニングから度肝を抜かれましたよ。まさか、アリーナの後ろのスロープから登場するとは。緊張しなかった？

将：緊張した？

沙我：いや、うれしかった（笑）。こんなところから登場できて花道ぐるっと歩けるんだって。ファンの顔が至近距離で見られたし、１階席の人も俺たちとあんなに近いなんて想像もしてないじゃないですか？面白かったですね。とにかく、あの日はいいライヴをしようって思ってて。緊張するときは練習不足だったり、間違えるんじゃないかっていう不安があるときなんですよ。

将：そうだね。俺も歴代のツアーファイナルの中でいちばん緊張しなかった。沙我くんも言ってたけど、武道館を成功させる意志にもとづいて、どう日々を過ごしてるか？っていうことだと思うんですよ。前日や当日になってあたふたするから緊張するんだっていうことは、それまでの活動を通して痛いほどわかってたし。

武道館前にロングツアーをやったのも良かったんだろうし。

将：それもあるし、一昨年の国際フォーラムが終わった後にバンドでいろいろ話したのも良かったんじゃないかな。そこで仲良しこよしだけのバンドじゃなくなったんじゃないかと思いますね。

沙我：内気な少年たちが社会の中で生きていくオトナに成長したんですよ（笑）。

将：人に気を遣わないメンバーがいないからね。

沙我：うん。

将：だけど、言わなきゃいけないことは言うようになった。

そこが転機だね。沙我くんは武道館でエロさ控えめだったけど。

沙我：違うんですよ。あの短パンの衣装で立ったはいいけど、“やっちまったね、自分”って思っちゃったんですよ（笑）。やっぱり、これ恥ずかしいって。二度とこんなに足は出さないと思って。

将：（笑）足を出すのはよかったけどね。ただ、上半身が王子様で下半身がお姫様だった（笑）。

沙我：そこが唯一、緊張したところでしたね。足を上げることで、緊迫するんですよ。“やべえ。見えるかな”って（笑）。

将：はははは！

沙我：あと、ライヴ中、Nao さんが俺に謎の言葉を話しかけてくるんですよ。でも、何言ってるのか全く聞こえなくて。

あんなに通る声でも、さすがにライヴ中は……。

沙我：ドラム台にほうに行くと何か言ってくるんですけど。

将：ははは。“見えてる、見えてる”って言ってたとか（笑）。

沙我：しかもいろんな表情なんですよ。キビしい顔してたり、笑いながら何か言ってたり。

（笑）それは謎ですねぇ。将くんは、あの場だから思わず言ってしまった言葉とかある？

将：“今日という日を一生、忘れない”なんて言うつもりなかったけど、みんなに言わされちゃった感じですね。

そういうのあるよね。沙我くんは感謝の思いを伝えてたけど。

沙我：ふだん、あまり感謝しないんですけど（笑）、あの日はちょっとだけ思いましたね。さっき将くんも言ってたけど、スタッフが俺たちにいかにいいライヴをさせるか考えてくれてたんだなって武道館に立って一瞬でわかりましたね。あと、ファンのコも成長してるなって。昔と比べて音でキャッチボールできるようになってて。

将：そうだね。

沙我：演奏に食いついてきてくれたり、それはすごく嬉しかったですね。自分たちもみんなをいかにノラせるか工夫しているので。

将：うん。30 本ライヴやってきてよかったなと思いましたね。

セットリストのテーマは？

将：武道館１日のためのセットリストじゃなくて、ツアーを経ての曲っていうのはあります。『閃光』で始まったのも、ツアーで培った流れだし。

沙我：ひょっとしたら、『VANDALIZE』のツアーファイナルのリベンジみたいなところもあるのかもしれないですね。あのときのライヴでは『the beautiful name』と最後の曲に持ってこられなかったんですけど、本当は『Waterfall』とくっつけて演奏したかったんです。ただ、あの時期にはまだムリだなと思っていて……そういう意味では、繋がっているライヴなのかもしれないし、やっと今回、２曲を最後に持ってこられるバンドになれたなって。次の段階に行けた気はしてます。

将：『春夏秋冬』や『平成十七年七月七日』で盛り上がって“わ～い、楽しかった！”って終わるライヴもいいけど、い

つか、その次に行かなければいけないっていう気持ちが数年前からあって、それが実を結んだのが武道館のファイナルだったのかもしれないですね。

沙我：あの頃やりたかったことが、気づいたらできてた。

スケール感とAlice Nineのエンターテインメント性が合体したライヴだった。

沙我：そうですね。いろんな人に“よかった！”って言われたのはすごくうれしいんですけど、次は“スゴイ！”って感想が返ってくるようなライヴをしたいですね。

そして、武道館でも披露した新曲が収録されるアルバム『GEMINI』は切なさや陰りのある曲もあるけれど、壮大で愛がある。『VANDALIZE』の流れも汲んでるのかなと思いました。

沙我：繋がってる部分はありますね。今までは、そのときそのときの想いをアルバムにしてきたんですけど、今回はトータルでバンドを表現しているというか。今だけじゃなく昔もひっくるめて英語表記のAlice Nineになってからの自分たちを表現しようとしたのかもしれない。前のアリス九號.のほうが名前のインパクトはあったかもしれないけれど、英語表記にして、フラットになったというか、聴くほうも変な先入観がなくなったと思うんですよ。そこを経て、『GEMINI』でやっと色を付けられた。

前号の虎くん、ヒロトくん、Naoくんの取材のときに２年前から作った曲も存在しているって話していたけれど。

将：曲作りで言うと、10年以上だもんね。

沙我：そう。１曲目の『I.』っていう曲はプリプロ期間が10年ぐらい。

将：ははは。いい曲だけどね。

沙我：高校生のときやってたバンドにこの曲原型があるんですよ。当時のメンバーに“こんな曲ダメだ”って言われて大幅に作り変えられたんですけど、これは作り変えられる前の状態ですね。

将：前のバンドの曲があるんだ。聴きてえ（笑）

沙我：当時は『青い春』っていうタイトルで。

将：メモしとこう（笑）

沙我：半年ぐらい前にYoutubeで見つけて“あったぁ！”って。でも、今のが断然いい。この曲で壮大にアルバムが始まるのは『VANDALIZE』と似てるけど、単純に曲としていいなっていうのがあったので。

沙我くんは『GEMINI』のメインソングライターですよね。

将：完全にそうですね。いろんなものを背負ってやってくれた。

歌詞は将くんなので、２人で相当突き詰めたのでは？

将：そうですね。沙我くんとやりとりして、曲のテーマや意図を汲み取って書いていきましたね。地球から月へ、なじみのある日常の世界からディープな世界へとみんなを連れていきたいみたいな。今回のアルバムって前半を後半で２つの顔を持っているというか、ハッキリ分かれているわけじゃなく、グラデーションになっていると思うんです。それも沙我くんから“二面性を出したい”っていう話を聞いていたので。

沙我：今まででいちばんアルバムのヴィジョンを考えて作った。

沙我くんの頭の中にはどんなイメージがあったんですか？

沙我：根底にあったのは、Alice Nineって見た目がいいってみんなに言われてっきたんですけど、その分、音楽的に誤解されるところもあって。

アイドル的に見られちゃったりとか。

沙我：それは自分たちでもわかってたんですけど、コンプレックスにもなっていて、言われれば言われるほど反動でもっと攻めていきたいっていう気持ちが生まれてきて。そんなことでムキになるのも恥ずかしいっていう気持ちもありつつ、結局、そういう反動もあったのかもしれないですね。入り口は広く作ってあるんだけど、後半でだんだん深いところに行くっていう流れとか。

そういう反動がアルバムの根っこにあるということ？

沙我：反動で言えば『VANDALIZE』のほうがそうなんですよ。さっき話したように国際フォーラムの後は自分の中でフラットになれたので、『GEMINI』は前半がふっきれてからの自分たち、『春夏秋冬』も自分たちが作ったいい曲なんだって受け入れられるようになってから作った曲が多いんです。

将：うん。

沙我：で、『GEMINI』は２年前から存在していた曲なので、後半の深いことに行くセクションは『VANDALIZE』色が強いというか、Alice Nineらしくないことをやってやろうっていう気持ちがあって、かなりロックですね。根底から説明すると、そういう２つの気持ちが今回のアルバムにはこもってる。

組曲「GEMINI」はどんどん曲が長くなっていったとか。

沙我：そうですね。プログレ（プログレッシブロック）なんか聴いてたことなか

ったけど、気づいたらプログレになってた（笑）

プロデューサーの岡野さんもプログレ好きなんでしょう？

沙我：ええ。“やべぇ。プログレ好きの人が聴いたら何て言うんだろう？”って思ってたけど、“いいじゃん”って言われて、そのときに初めて“俺ってスゴイのかもしれない”って（笑）

将：誤解してほしくないのは、プロデューサーの意図があって、こういう曲ができたわけじゃない。

沙我：そう。最初は“こんな10分を超える曲なんてやめてよ”って反対されましたよ（笑）。でも、メロディもいいし、ちゃんと聴かせられる曲だっていう自信があったからなのかもしれない。

基本がメロディアスだから、Alice Nine流プログレ。

将：実は完成はしてなかったけど、シングル『華【hae・na】』のときにも候補曲として選ばれた曲だったんですよ。そういうキャッチーな要素があったメロディに沙我くんが奥行きと壮大さを加えたっていう曲。だから、俺は最初っから、この曲をリードにしたくて、そういってたもんね。

沙我：うん。

将：岡野さんは『4U』とか『蜃気楼』でPVを撮ればいいんじゃなね？って言ってたけど、“いや、いや『GEMINI』でって”。

沙我：俺は作った本人だから、客観的には聴けなくて選べないんですよ。そしたら『GEMINI』に決まって…攻めてるなって（笑）。でも、そういうところが面白いバンドだなと思いました。

ポップな面とアーティスティックな面が同居してるって前回の取材で３人も発言してたんですよ。『Stargazer:』には、“二人はきっと魂の共鳴者”っていう歌詞が出てくるけど、そういう意味でも“双子座”を意味する『GEMINI』？

将：きっと同じ人間が歌詞を書いてるので、どこかで繋がってるんでしょうね。タイトルは完全にアルバムのコンセプトからひっぱられた言葉ですね。ほかにも対になるような曲のタイトルが多いんですよ。『I.』と『4U』だったり、『KING&QUEEN』だったり、最後の『birth in the death』にしてもそうだし。一貫性のあるブレのない作品っていうのは意識して。より深く人に伝えたいと思ったんですよね。耳障りがポップなアルバムではないのかもしれないけど。

今回、アッパーな曲は少ないもんね。

将：（笑）これでもがんばったのに（笑）

沙我：確かに少ない。

将：最初は全然なかったんですよ。で、“やばくね？”っていう話になって大慌てで『RUMWOLF』や『KING&QUEEN』が出来たっていう。

沙我：最初、ヒロト色の曲がなかったんですよ。それじゃあ、ヒロトのファンが悲しむし、虎もヒロトも曲を作るんだから、それぞれの色があったほうが面白いと思ったんですよね。

あと、今回のアルバムの将くんの歌は表情豊かだなって。

沙我：曲は難しいんですよ、俺は基本、自分が歌える曲しか作らないんですけど、今回はそうじゃない曲も持ってたんですよ。もう投げやりですよ。

将：（苦笑）投げやり。

（笑）投げっぱなしでしょ？「風凛」という曲も今までにない歌い方をしてて新鮮だったし。

沙我：そういう難しい曲をちゃんと歌うってスゴイことだし。

将：以前は歌のメロディを自分で全部つけてた時期もあったんだけど、だんだん、沙我くんがメロディも提示してくれるようになって。ただ、そこの変わり目の時期に僕はうまく対応ができなくて、俺的にはこのメロディをこう歌いたいっていうイメージを明確にできないまま、レコーディングに入って、結果、クオリティが上がらなかったこともあったんですね。で、今回は沙我くんを始めとする原曲者の意図、イメージをより忠実に再現する歌をいたおうっていうのがあったんですよ。それもさっき話したようにブレたくなかったからなんですけど。沙我くんは今回、ホントに考えて考え抜いたと思うんですよ。曲にダメ出しされるのが好きじゃないと思うので、練りに練ったものを持ってくる。

デモの時点で構築されてる。

将：そう、そう。僕はどっちかっていうとひらめき型で“こんなの、どう？”って投げかけるほうなんですけど、沙我くんの考えの深さやいろんな視点から曲を作る姿勢はホントに尊敬してますね。歌は難しかったけど（笑）

個人的にはラストの「birth in the death」がすごく好きなんですよ。宇宙的な視点の中に人の命にキラめきが表現されていて、人生がじんでいるというか。

沙我：その曲を誉められるのは最高に嬉しいことなんです。いちばん最後の曲がいちばん自分のパーソナルな部分

に近いというか、深いところなんですよね。おそらく歌詞もそうだと思うし。

将：そうだね。実はメンバーの中で“やりたい”っていう声がいちばん多かった曲です。

沙我：Nao さんがやりたいって言ってビックリしました。

将：（笑）珍しいよね。

沙我：ドラムない曲なのに。

打ち込みだもんね。

沙我：それに Nao さんが“この曲をやりたい”って主張すること自体、レアなんですよ。

受け身というか、受け入れる体勢なわけだ。

将：うん。

沙我：俺としてはドラムが打ち込みだから、“俺のことはどう考えてるんだ！？”って怒ると思ったんですけど、やりたいなんて、この人変わってるなと（笑）

いい曲だからですよ～。あったかい気持ちになる歌詞だし。

将：歌詞は自分の価値観の根底にあることですね。終わりがあるからこそ、今という瞬間が美しく、キラめいてるっていう。ダークに捉えられるかもしれないけど、言っていることはすごく前向きなので。

“俺は夜空に　俺は夜空に　只　指を翳し願ってる”っていうサビが泣けるんですよ。

沙我：そういう言葉をハメるかってビックリしましたね。

将：魂で叫べるような曲が歌えてよかったです。

沙我：ライヴで演奏するのがいちばん楽しみな曲でもあり、いちばん表現手段に悩みそうな曲でもありますね。

聴き終わったあとに愛が残る。この曲で味わったのと同じ感動が武道館のラストにもあったんです。

将＆沙我：おおっ！

そこで Alice Nine というバンド像が伝わってきたというか。マクロでミクロというか、壮大で温かいんだなって。

沙我：そう言ってくれるのはいちばんうれしいことですね。表現したいものの根底にあるのは“愛”だったりするんですよ。いろいろ提示するけれど、最終的にはそこしかない。

うん、うん。スピリチュアルなメッセージがストレートに伝わるバンドになったなって。

沙我：じゃあ、今度はそれを東京ドームで。

ぜひ。“TOKYO GALAXY Ⅱ”を。

将：（笑）シリーズ化されてる。

ははは。『GEMINI』って願いがこめられたアルバムなので、２人からメッセージをいただければと思うんですが。

将：歌詞でいうと、自分は今まですごくコンプレックスがあって、戦うために“自分に負けるな”みたいな内容のものが多かったと思うんですね。敵だったり、攻撃対象を作って自分という存在を形成していくみたいな。でも、今はそうじゃなくて、まず自分自身を、まわりの状況を愛するようになった。自分を愛せない限り、人のことも愛せないと思うし、人を愛せなければ何も変わっていかないと思うので……。なので、聴いてくれる人にも自分を愛して、日々を歩いていってほしいというメッセージが込められてます。

沙我：僕は……もちろん音楽が好きでやってるんですけど、やればやるほど悲しいもあって……。たかが音楽されど音楽だと思ってるんですよ。たかが音楽をいかにそうさせないかの戦い。価値のあるものとして、いかに人に伝えるか。それを僕らはやらないといけないと思っているし、Alice Nine のフィルターを通して伝えていきたいっていうのはありますね。

それは今の時代性も考えて思っていること？

沙我：いや、あまり関係なしに。

なるほど。武道館終演後に４月から始まる全11公演のツアーが発表されたけど、今後は？

将：そうですね。春にツアーをやりますが、去年の 30本を比べるとそんなに本数が多くないので、チケットをとれるかどうかは保証できないっていう（笑）

急がないとね。早くアルバムの曲たちを演奏したい？

沙我：やりたいですけど。

将：（笑）やりたいけど？

沙我：今回のアルバムを全て表現するのには……

将：そうだね。ホールが合っている世界観だからね。今回、小さいキャパの会場もあるし、どうしようねって。

沙我：だから、ツアーは春だけじゃ終わらないんじゃないですかね。

将：タイトルも『Prelude to “GEMINI”』ですからね。

始まりっていうことだ。

沙我：そうですね。そこは続きがあると思ってもらえれば。

じゃあ、2011年はライヴをたくさんやってくれる？

沙我：“GEMINI”の年にしたいですね。そのために必要なライヴの本数をやりたい。このアルバムをちゃんと消化してから次に行きたいですね。